

セクシュアル・マイノリティ

の人権②

誰もがありのままに 安心できる学校を



自分の身体や心について悩み、その悩みや不安を誰にも打ち明けられずに、一人で抱え込んでいる子どもたちがいます。

その様な「セクシュアル・マイノリティの子どもたちが安心して自分らしさを発揮できる」「周りの子どもたちも互いを理解し認め合う」ことを大切にしながら「誰もが安心して過ごせる社会」をつくる力を育てていきましょう。

セクシュアル・マイノリティの子どもへの様々な配慮の実態が明らかに 「学校における性同一性障害に係る対応に関する状況調査結果」(文部科学省 平成26年)

この調査は、性同一性障がいの子どもの対応の充実をめざし、現状を把握するために行われました。調査対象は学校が把握する事例に限られ、本人が望まない場合は回答を求めなかったため、文部科学省は、「この件数は必ずしも学校における性同一性障害を有する者及びその可能性のある者の実数を反映しているものとは言えない」としています。

子ども本人または保護者が学校側に悩みを相談したのは606件でした。小学校93件・中学校110件・高等学校403件で、年齢が上がるごとに増加しています。606件のうち、性同一性障がいであることを明らかにして生活しているのは、約2割の136件でした。相談を受けた学校のうち約6割の学校で、本人の希望する制服着用やトイレの使用を認めるなど配慮していました。一方、子どもや保護者の思いや悩みを聞き取り、相談の上、結果として特別な配慮を行っていないという事例もあることがうかがえました。

1. セクシュアル・マイノリティの子どもたちは今



セクシュアル・マイノリティの子どもは、カミングアウトしてなくても、どの学校にもいる可能性があります。セクシュアル・マイノリティの若者を対象に行われた調査によると、当事者の多くが、学校時代に次のような経験・体験をしているという結果が出ています。

- 自分自身がセクシュアル・マイノリティであることを小学校～思春期の頃に大半が自覚している。
- しかし、男子の約5割、女子の約3割は、誰にもそのことを話さなかった。
- カミングアウトする相手は約7割が同級生で、教員や親などの大人を選ぶ割合は低い。(1割程度)
- セクシュアル・マイノリティを対象とした冗談やからかいを、約8割が見聞きしたことがある。
- 回答者の約7割がいじめを経験し、その影響によって約3割が自死を考えたことがある。

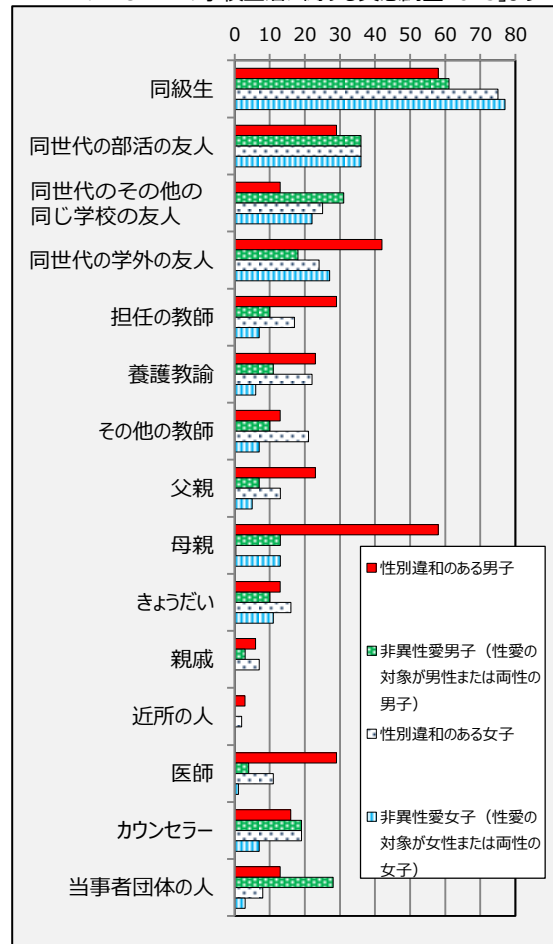
「LGBTの学校生活に関する実態調査2013」より
(いのちリスペクト。ホワイトリボン・キャンペーン)

セクシュアル・マイノリティの子どもが多く、無視や仲間はずれ等のいじめや暴力の被害にあっていることや、その結果、不登校やリストカットなどの行為、周りの人への信頼感の喪失につながっていることも、多く報告されています。

学校の中の不要な男女の区別、授業の内容、毎日の子どもたちとのやりとりなど、すべての学校生活の中で子どもたちが「ありのままの自分でもいいんだ」と安心して過ごせているかどうか、教職員自身が常に意識していることが必要です。子どもたちが「相談してみようかな」と思える学校になっているかが問われています。

自分自身がLGBTであることを打ち明けた相手(複数回答)

「LGBTの学校生活に関する実態調査2013」より



2. 子どもたちが安心して過ごせる学校に



セクシュアル・マイノリティの子どもたちが安心して学校生活を送れるようにするためには、これらの子どもたちの思いや悩み、願いを受け止め、学校体制や環境をつくっていくと共に、周りの子どもたちのセクシュアル・マイノリティについての正しい理解やその子どもを受け止める集団をつくるのが大切です。また、その前提として、教職員自身の理解や認識が求められることは言うまでもありません。

①子どもの思いを受け止める相談体制

■気持ちを受容し安心感をもてるように

相談を受けた時に、「言ってくれてありがとう」「心配しなくてもいいんだよ」「自分のせいだと思う必要はないんだよ」と、思いを受容し、悩みや不安な気持ちに共感しながら、安心して相談できることを伝える。尚、保護者や家族は理解者であるとは限らず、本人にとって大きな壁であることが多い。

■寄り添い一緒に考える姿勢を伝える

教職員が、「必要な知識を持っていること」「あなたの困っていることや気持ち、悩みを知りたいと思うし、これからどうすれば安心して学校生活を送れるか、一緒に考えたいこと」を伝えた上で子どもに寄り添い、共に歩む姿勢を示すこと。

■外部の相談窓口と連携する

大阪府ではウェブページで各種相談窓口を紹介している。本人にセクシュアル・マイノリティについての専門的な相談窓口を紹介しサポートする。

- QWRC 電話相談 06-6585-0751 第1月曜 19時30分～22時30分
- AGP「こころの相談」 050-5539-0246 火曜 20時～22時

②子どもが安心できる配慮について

■子ども本人の気持ちを受け止め必要な配慮を行う

様々な学校生活の場面で、セクシュアル・マイノリティの子どもは、自分のありようについて悩んでおり、これらの子どもたちが安心して学校生活を送れるための必要な配慮を本人の希望を十分ふまえて行う。

参考

性同一性障がいの子どもの対応事例（文部科学省「学校における性同一性障害に係る対応に関する状況調査」）

先に挙げた調査結果からは全国の学校で様々な特別な配慮が行われていることが報告されました。主な内容は次の通りです。

【本人への配慮】

- 服装**：自認する性別の制服着用、体操着登校、自認する性別用のスリッパ着用
- 更衣**：保健室の利用、多目的トイレを更衣室として使用する
- トイレ**：職員トイレ、多目的トイレの使用
- 名前**：通称（性自認に合わせた名前）で呼ぶ
- 体育**：自認する性別のグループに入れるようにする
- 水泳**：上半身が隠れる水着の着用、補習を別日に実施、レポートで代替
- 宿泊行事**：1人部屋を使用する。入浴時間をずらす
- 保健行事**：内科検診を別途実施する

【学校・学級等での配慮・取組】

- 呼び方**：全ての子どもを「さん」付けで呼ぶ様に統一する
- 持ち物**：男女の色分けをできるだけ避ける。
- 授業**：男女混合のグループをつくり、発言しやすくする
- 他の子ども**：本人の申し出による・保護者の了解を得て、入学直後に全校生に対し説明する
- 保護者・PTA**：入学時に保護者会で説明する

③周りの子どもたちの理解と安心して過ごせる集団づくり・環境づくり

■子どもが安心して過ごせる集団をつくる

セクシュアル・マイノリティの子どもが安心して学校生活を送ることができるように、学校生活の中での不必要な男女別をなくすことや、誰もが安心して自分らしさを出せる集団づくりを進める。

■セクシュアル・マイノリティについての情報を発信する

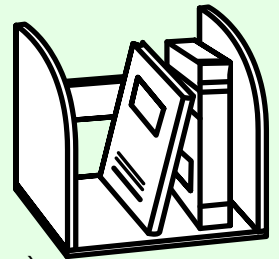
- ・図書室や保健室、教室などに、セクシュアル・マイノリティに関連した図書を置く。
- ・新聞記事などメディアで話題になったことについて、日頃から紹介する。

■年間の人権学習計画の中で取り組む

- ・性の多様性やセクシュアル・マイノリティの人権についての学習をする。

■取組の参考になる資料・教材

- 「人権教育リーフレット4 セクシュアル・マイノリティの人権」（大阪府教育センター）
- 「人権教育COMPASS2 ⑨『セクシュアル・マイノリティを考える』」（大阪府教育センター）
- 「わたし 出会い 発見 Part 8」（大阪府人権教育研究協議会）



④教職員の基本的な知識や理解のための研修

■私たち教職員自身が学ぶ

- ・教職員のセクシュアル・マイノリティについての基本的な知識や理解のための研修を実施する。
- ・セクシュアル・マイノリティの当事者の体験や思いを聞く機会を設定する

参考

教職員のセクシュアル・マイノリティに関する意識調査

宝塚大学看護学部の日高庸晴教授による約6,000人の教職員を対象としたアンケート調査によると、次のような結果が出ています。

- 「性同一性障がい」について授業で教える必要がある…約73%
 - 「同性愛」について授業で教える必要がある…約63%
- 一方、別の質問では、次の結果となっています。
- 実際に授業で取り入れた…約14%
 - 性的指向について誤解、あるいは不確かな知識や認識がある
(ex) ・性的指向は本人の選択の問題と捉えている…約38%
・性的指向は本人の選択かわからない…約33%

教員自身がどう授業内でセクシュアル・マイノリティに関して取り扱えばよいのかわかっていないことや、また多くの教員がセクシュアル・マイノリティについて正確な知識がないことがうかがえました。

<http://www.health-issue.jp/f/>（「教員5,979人のLGBT意識調査レポート」平成26年）



子どもたちは、誰が信頼できる大人かをしっかり見えています。この人ならば自分のことをわかってくれるだろうと信じ期待した時、ありのままの自分を開くことができます。学校での取組や私たちのさりげない一言が、子どもたちの人生を変えることとなります。まず、教職員が学び、そして、セクシュアルマイノリティの子どもやその保護者の困り感を知ることからはじめていきましょう。

3. 学校でできること（実践事例）

事例 1

Aが安心して生活が送れるように 小学校での取組より

6年生のAは、中学進学に際して制服について気にし始めるなど、自分の性に違和感を持ち始めました。そして、Aは、日々の生活の中での不安な気持ちを保護者や教職員には伝えることができました。

そこで、Aが安心して過ごせるようになるには、学校全体として取り組む必要があると考え、どのような取組を進めるかを検討しました。

まず、全校集会で「色」をテーマに学習を行いました。子どもたちは、固定的な考え方にとらわれることなく、多様な個性を認め合うことの大切さについて考えました。

次に、セクシュアル・マイノリティの当事者の方との出会いを設定しました。その方からは、性に関する違和感と向き合ってきた生き方と、「ありのまま、自分らしく生きる」ことへの思いや願いを聞きました。Aは、「同じような人がいてよかった。安心した。また会いたい」と、担任に話しました。

そんなAの様子を見て、「Aが安心して生活が送れるように」、学校としてさらにできることはないかを考え、同じ当事者の方との出会いの場を設定しました。そのことが、Aのありのままの姿を理解しようとする、周りの子どもたちが増え、Aが安心して生活が送れることにつながりました。

現在、Aの中学進学に向け、小中連携の中で、今後必要な対応について話し合いを重ねています。

事例 2

生きづらさを感じるのは、本人の問題ではなく、周りの問題 高等学校での取組より

「もし友だちがLGBTだったら」といったテーマの映画づくりに取り組んでいた時、説明をしていた教員に、Bはバイセクシャルであることをカミングアウトしました。

その後、「福祉の授業（自由研究発表）でセクシュアル・マイノリティについての研究発表とカミングアウトをしたい」と表明しました。授業担当の教員は、カミングアウトがBと周りの生徒にとってプラスになるのか、Bと丁寧に向き合いながら一緒に考えました。

発表の前に、Bと大人のセクシュアル・マイノリティの当事者との出会いを設定しました。これまで生きてきた経験をもとに話される言葉は、Bにとって自分と重なり共感でき、Bをエンパワーすることにつながりました。

その後、Bは授業の中で、周りにカミングアウトしました。Bのカミングアウトをきっかけに、さらに学びを深めるため、別のセクシュアル・マイノリティの当事者の青年と出会う授業を設定しました。日常生活での様々な場面（制服・通学・トイレ・授業）での具体的な姿をシミュレートしながら学びを深めていきました。このことから、周りの生徒たちは、生きづらさを感じるのは、本人の問題ではなく、周りの問題であることを学んでいきました。

そして、Bとの関わりをきっかけに、学校としてどのようなことができるのか、プロジェクトチームを結成し、組織としての対応ができるようになりました。